

弊社は明治二十九年に森山章之丞により同文館として創業され、明治四十五年に渋沢栄一著『青淵百話 乾・坤』を刊行、大正二年には同著の『縮刷版』（総ルビ付）も刊行され、両著ともたちまちベストセラーになりました。

百年余りが経った今、弊社には『青淵百話 乾・坤』は明治四十五年七月発行の第三版と、大正二年七月発行の『縮刷版』（総ルビ付）初版が各一部のみ資料として現存しています。創業百二十五年の記念として、当時のメルクマールというべき歴史的書籍を復刻することにいたしました。

渋沢氏は幕末期から昭和にかけて活躍され、多くの企業や経済団体の設立・育成に携わり、かたちを変えてもその多くが現在も日本の主要企業として存続しております。「道徳経済合一説」をはじめとして多くの教を残され、今も読書会や勉強会など、その教を学ぶ活動が絶えません。

創業者森山章之丞と渋沢氏は親交があり、弊社の社史『風雪八十年 同文館創業八十年史』（昭和五十一年十一月刊）には、『大百科辞典』の刊行時、激励のために渋沢氏が来社された写真が掲載されています。『青淵百話 乾・坤』刊行にあたっては、弊社の社員であった井口正之氏が深谷の渋沢邸に通って口述を書き起こし、これに渋沢氏が加筆・修正を加えて原稿になったとされています。井口氏の足跡についてはこれまであまり知られていないことから、弊社で調べてみましたところ、明治四十四年七月十二日の渋沢栄一日記に「同文館員江口正之氏来《（井口正之）》リ理想婦人問題ニテ意見ヲ述フ」との記述が見られました（『渋沢栄一伝記資料 別巻第一 日記（一）』）。

井口氏の曾孫にあたる、経営コンサルタントの木本康聖様と女子プロゴルファーの木本若葉様からは、曾祖父の井口氏が渋沢邸に一年半通われて起草されたこと、井口氏が渋沢氏の言葉をまとめて下書きされたこと、井口氏は当時の同文館で働いていたこと、渋沢氏のもとにあまた寄せられた執筆依頼の中、井口氏のみがご了解を得て直接聞き書きを行ったこと、木本家の伝承では、渋沢氏に直接話を聞いて書かれたものは『青淵百話』のみであること、渋沢氏と共に写っている写真が現存すること、などが分かりました。

なお、同著内に収録されております「渋沢青淵先生少伝」を起編された第一国立銀行役員の大沢正道氏のご子孫については調査が行き届かず、また、同著内の写真についても所有者と当時の撮影者が判明しませんでした。併せて今後の課題とさせていただきます。

復刻に際しては、当時の書籍をそのまま電子化しております。現在においては不適切な表現や事柄なども、刊行当時は通常の表現であったことから、本書の歴史的意義に鑑みてそのまま収録しております。また、利便を図るために、簡易検索機能を乾・坤巻に付加いたしました。

このたびの復刻に際しては、公益財団法人渋沢栄一記念財団、同財団相談役渋沢雅英氏、同財団業務執行理事・渋沢史料館館長井上潤氏、木本康聖氏など多くの皆様に無数のご教示とご協力を賜りました。ここに感謝の意を表します。

このデジタル復刻版によって渋沢栄一研究がさらに発展し、現代にも通用する教を多くの方が学ばれますことを願ってやみません。

令和三年十月吉日

同文館出版株式会社 代表取締役 中島治久

販売価格のご案内

本体価格 132,000円＋税（分売不可・同時1アクセス）

同文館出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-41

TEL : 03-3294-1801 FAX : 03-3294-1807

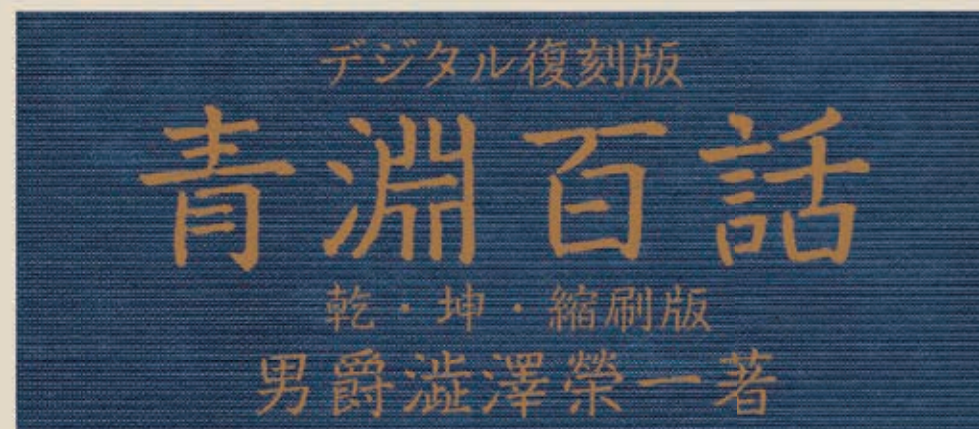
URL : <http://www.dobunkan.co.jp/>

E-mail : info@dobunkan.co.jp

お問い合わせは、上記TEL、FAX、またはメールアドレスまでお願いします。

取扱店

道義観、道徳観、倫理観と経済を一致させる
「道徳経済合一」の考えを主張し続けた経営哲学——
これから先どうすべきかと思い悩む人々に、
貴重な示唆を与えてくれる渋沢栄一の言葉を復刻！



大正二年七月十八日発行

明治四十五年卑月端午発行／菊判

渋沢栄一略歴

渋沢栄一は天保11年2月13日(西暦:1840年3月16日)、現在の埼玉県深谷市血洗島の農家に生まれました。家業の畑作、藍玉の製造・販売、養蚕を手伝う一方、幼い頃から父に学問の手解きを受け、従兄弟の尾高惇忠から本格的に「論語」などを学びます。

「尊王攘夷」思想の影響を受けた栄一や従兄たちは、高崎城乗っ取りの計画を立てましたが中止し、京都へ向かいます。

郷里を離れた栄一は一橋慶喜に仕えることになり、一橋家の家政の改善などに実力を発揮し、次第に認められていきます。

栄一は27歳の時、15代将軍となった徳川慶喜の実弟・後の水戸藩主、徳川昭武に随行しバリの万国博覧会を見学するほか欧州諸国の実情を見聞し、先進諸国の社会の内情に広く通ずることができました。

明治維新となり欧州から帰国した栄一は、「商法会所」を静岡に設立、その後明治政府に招かれ大蔵省の一員として新しい国づくりに深く関わります。

1873(明治6)年に大蔵省を辞した後、栄一は民間経済人として活動しました。そのスタートは「第一国立銀行」の総監役(後に頭取)でした。

栄一は第一国立銀行を拠点に、株式会社組織による企業の創設・育成に力を入れ、また、「道徳経済合一説」を説き続け、生涯に約500もの企業に関わったといわれています。

栄一は、約600の教育機関・社会公共事業の支援並びに民間外交に尽力し、多くの人々に惜しまれながら1931(昭和6)年11月11日、91歳の生涯を閉じました。

〈出典：公益財団法人 渋沢栄一記念財団ホームページ〉

人が生きていくうえでの術や正しい道筋、道德観、人に対しての思いを滔々と語る！

「解題に代えて ——井上 潤（渋沢史料館館長）」より抜粋

渋沢栄一の言葉は今の時代に十分通用する、むしろ当時の行動、言葉が今、より強い光を發して我々に考えを伝えてくれる、また、それを理解させてくれるような人物として取り上げられているようにも思います。

今、大河ドラマを見ている方々は、単なるドラマとしてではなく、毎回の放送の中で、渋沢栄一から何かしら学べるものがあるかもしれない、そんな目で見ている人が多いと、感想めいたものが耳に入ってきています。「正しい道筋の利益を求める」「私より公の利益を大事にする」といった主たる考えがあって、「積極的にことにあたる」ことを勧めています。お膳立てされたものに淡々と導かれるままに動くのではなく、より一層おいしいものとして食べるには、自ら箸を取って一歩先んじてことにあたらなければならない、そうでなければ本当の意味での良い結果には結びつかない、とよく言いました。「日々に新たなり」も多く語られた言葉です。毎日いろいろなことがあるけれど、次の日には気分を一新させ、新たな気持ちで前を向いて進んで行こうという趣旨です。

言葉だけを聞くと、「ごもっともです」とも言うべき、至極当然のことばかりです。では、なぜ当時も今も通用するのかと言えば、それが実践に置き換えられているか、日頃の生活の中で行われているかと呼び起こす言葉だからという気がしています。

栄一は、自分なりの明確なビジョンを持っていました。人に何かを伝える場面では、小さな目標を出すのではなく、それをやることによって、この世の中や皆の生活がこうなるんだという、先の明確なたちを分かりやすく伝えてくれる人でもありました。しかも実体験に沿った話が多いため、理解しやすい。

余談になりますが、栄一は落語家とも交流を持っていました。新作の落語の速記本が出るとすぐさま買って読み、落語家呼んで演じてもらうこともあったほどです。落語好きということもあったのでしょうか、語る上での間や抑揚、エモーショナルな表現方法を落語から学んでいたのではないのでしょうか。講演では、時々ダジャレのようなものを飛ばすこともあります。自分の伝えたいことが、単なる言葉としてではなく、どうすれば分かりやすく伝わるのか、栄一は語ることにしても学んでいたのだと思います。

渋沢栄一は数多くの企業を育ててきました。長く続いている企業が多く、百年企業もいくつもあります。では、栄一の教えを皆が実践し、正しい道筋で順調に育ってきたかと言うと、全てがそうではないはずですが、栄一の理念や思い、考えがどのように受け継がれているかと言えば、やはり資本主義社会においては、利益を最優先に考えてしまうところがあるわけです。直るものが備わったほうが、間違った道に行かないと伝えようとしていました。それが冒頭で述べた、活字化することを好まなかったというエピソードにつながります。

人を育てることについても同様のことが言えます。渋沢栄一は、人を育てることを非常に意識していた人です。何年で次のステップを踏みなさい、決してそんなやり方ではなく、その人が活躍できる場がどこなのか、適材適所を意識し、本人にも自覚させてその道を進ませることの重要性を語っています。また、より高いポジションを目指す意識を持たせる言葉が、『青淵百話』にも多く含まれています。

《乾》

- 1 天命論
- 2 人生観
- 3 國家
- 4 社会
- 5 道理
- 6 迷信
- 7 統一的大宗教
- 8 余が處世主義
- 9 公生涯と私生涯
- 10 天の使命
- 11 余が家訓
- 12 忠君愛國
- 13 言忠信に行篤敬
- 14 益友と損友
- 15 敬意と敬禮
- 16 一事一物も精神的たれ
- 17 眞誠の幸福
- 18 口舌は福禍の門
- 19 清濁併せ吞まざるの辨
- 20 實業界より見たる孔夫子
- 21 龍門社訓言
- 22 論語と算盤
- 23 論語主義と權利思想
- 24 米櫃演説
- 25 商業の眞意義
- 26 日本の商業道德
- 27 武士道と實業
- 28 新時代の實業家に望む
- 29 事業經營に対する思想
- 30 企業家の心得
- 31 成功論
- 32 成敗を意とする勿れ
- 33 事業家と國家的觀念
- 34 富貴榮達と道德
- 35 國家的觀念の權化カーネギー氏
- 36 危險思想の發生と實業家の覺悟
- 37 當來の勞働問題
- 38 社會に對する富豪の義務
- 39 就職難善後策
- 40 地方繁榮策
- 41 立志の工夫
- 42 功名心
- 43 現代學生氣質
- 44 頽廢せし師弟の情誼
- 45 始めて世に立つ青年の心得
- 46 役に立つ青年
- 47 余が好む青年の性格
- 48 會社銀行員の必要的資格
- 49 明治の實業教育
- 50 女子高等教育論
- 51 女子教育の本領
- 52 理想的の妻たる資格
- 53 處女の覺悟
- 54 婚姻と男女交際
- 55 家庭
- 56 人生の慰安
- 57 娯樂
- 58 衣食住
- 59 貯蓄と貯蓄機關
- 60 交際の心得
- 61 人格の修養
- 62 精神修養と陽明學
- 63 常識の修養法
- 64 習慣性に就いて
- 65 大事と小事
- 66 意志の鍛鍊
- 67 克己心養成法

《坤》

- 68 元氣振興の急務
- 69 勇氣の養ひ方
- 70 健康維持策
- 71 服従と反抗
- 72 獨立自營
- 73 悲觀と樂觀
- 74 逆境處世法
- 75 白河樂翁公の犠牲的精神
- 76 無學成功の三友人
- 77 先輩と後輩
- 78 傭者被傭者の心得
- 79 過失の責め方
- 80 激務處理法
- 81 貧乏暇無しの説
- 82 讀書法
- 83 故郷に對する感想
- 84 忘れ難き兩先輩の親切
- 85 吾が生涯の悔恨事
- 86 米國漫遊の九十日間
- 87 老後の思ひ出
- 88 余が少年時代
- 89 立志出郷關
- 90 浪人生活
- 91 一橋家出仕
- 92 兵隊募集の苦心
- 93 産業獎勵と藩札發行
- 94 幕府出仕
- 95 外國行
- 96 歸朝と形勢の一變
- 97 静岡藩出仕と常平倉
- 98 明治政府出仕
- 99 在官中の事業
- 100 退官と建白書

附録

澁澤青淵先生小傳／大澤正道編

卷頭

題辭／徳川慶喜公揮毫

口繪

一澁澤男爵の今昔

二書齋に於ける青淵先生と青淵百話原稿

三澁澤男爵の筆跡（家訓處世接物の綱領七則）

自序

縮刷發行に就いて

凡例



生先開青て立に書堂進受内閣卿子王



法蘭西刊由森 國男得 成之京日赤



人失命と爵男得論るに於に開初

青淵百話

男爵 澁澤栄一著

東京同文館蔵版

樂夫天命
復奚難

徳川慶喜

（徳川慶喜 揮毫）